

「21世紀COEプログラム」(平成15年度採択)中間評価結果

機関名	千葉大学	拠点番号	F05
申請分野	医学系		
拠点プログラム名称 (英訳名)	日本文化型看護学の創出・国際発信拠点(実践知に基づく看護学の確立と展開) The Center for the Creation and Dissemination of New Japanese Nursing Science Incorporating Culturally Appropriate Care		
研究分野及びキーワード	〈研究分野:看護学〉(看護技術)(看護倫理学)(看護教育学)(家族看護学)(地域看護学)		
専攻等名	看護学研究科看護学専攻 医学研究院環境健康科学専攻 社会文化科学研究科日本研究専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー名) 石垣 和子 教授 他 10名		

◇拠点形成の目的、必要性・重要性等：大学からの報告書(平成17年4月現在)を抜粋

<p>&lt;本拠点がカバーする学問分野について&gt; この拠点のカバーする学問分野は看護学全体である。看護の専門分野を特定せず、対人援助・支援技術と看護職者養成方法の2側面から看護学全体の根幹的をなす部分を研究する。</p>
<p>&lt;本拠点の目的&gt; 本拠点は、日本文化を反映した看護学の学問体系構築を中心にすえ、日本国民の生涯を通じた健康と生活の質の向上に貢献するとともに、グローバル化の進む地球上の各国に向けて文化尊重看護学の重要性を発信することを目的としている。対人援助が基盤となる看護学は、個々人の生活や考え方の背景となる文化的側面を重視する必要性がある。当拠点は、蓄積してきた研究成果である看護実践知を土台にして研究し、世界に向けて日本の看護学の学問体系を構築する中心的存在であることを示す。また文化という点では、千葉大学の将来構想である学際的な学問分野の創設とも合致しており、千葉大学の複数の研究科の支援を得て研究組織を組み、斬新で質の高い成果を追求する。</p>
<p>&lt;計画：当初目的に対する進捗状況等&gt; [計画]H15年度には研究グループの組織化と実践知プール(データベース)の整理、H16年度には実践知プールから選択した一次研究のメタ研究、不足する実践知の追加のための研究が計画されていた。 [進捗状況]予定どおり進行してきた。内容は以下のとおり。①研究グループとして7つのサブプロジェクト(AからG)が完成。看護学全教員及び全大学院生が1～3のサブプロジェクト所属。COEフェロー(ポストドク)としてH15年度2名、H16年度7名雇用。②当研究科の過去の博士論文全文及び修士論文抄録のデータベース(実践知プール)を作成。③量的研究とは異なる質的研究のメタ研究方法(まったく新しい研究方法)を試行錯誤を重ねて開発、各サブグループで成果を産出。17年度以降予定の多くの大学を巻き込んだ体系だったメタ研究計画の基礎が完成。④メタ研究素材追加のための実践知研究遂行。</p>
<p>&lt;本拠点の特色&gt; ①歴史的に日本の看護学を先頭に立って作ってきた経緯のある看護学部の上に立つ研究科、しかも最も学生規模が大きくあらゆる看護専門領域が博士後期課程を持つ研究科として、このプロジェクトを通じて学問構築の先鞭をつけること。②発展途上にある日本の看護学が直輸入しがちな欧米型の看護学に対し、日本文化型に着目していること。③千葉大学看護学研究科が産出してきた文化的な視点を含んだ看護研究成果(実践知)やすでに公表されている同様の研究成果を一次研究とすること。④メタ研究という新たな方法を開発すること。⑤臨床現場と協働でメタ研究結果を検証すること。</p>
<p>&lt;本拠点のCOEとしての重要性・発展性&gt; ①従来細分されてきた看護学の専門分野(成人、母性、小児など)の枠を取り払った研究組織、共同研究による看護学の総合的体系の明確化及びその過程を通じた教員の相互理解・研究能力向上・有機的連携。②社会文化科学研究科・医学研究院との共同研究による研究成果の広がりや深まり、及び博士後期課程在学者及びCOEフェローの文化的能力の向上。③国際シンポジウムや外国人研究者招聘、国際学会発表等を通じた若手研究者の国際性の向上。④文化に敏感な若手研究者・看護実践者の育成。⑤それに伴う質の高い看護研究の産生。</p>
<p>&lt;本プログラム終了後に期待される研究・教育の成果&gt; 国際的に見た日本の看護学の特徴が明確になる。海外研究者が日本の看護に関心を持ち、訪問者が増え、日本の看護者の国際性がいっそう高まる。経験的に行われがちであった日本の看護実践に対し、実践のよりどころとなる体系書ができ、当然ながら引用文献にも当たることのできるようになる。教科書に引用されるような質の高い研究が増える。対人援助に関する専門領域を含む他の学問分野(心理学、教育学など)にも学問的な波及効果を及ぼす。</p>
<p>&lt;本拠点における学術的・社会的意義等&gt; 従来はどちらかといえばあるべき論で構成されていたのに対し、メタ研究により、これまで蓄積されていた研究成果が生かされ、それらを基にした根拠に基づく看護学体系が構築される。メタ研究のフィードバックとして看護学研究の質が向上する。世界でもまだわずかにしか見られない質的研究のメタ研究方法論が開発され、このような研究手法をとる他の学問分野(文科系の学問分野)にもメタ研究導入のきっかけとなる。複数の研究科が協働することにより、新たな学問分野が日本に誕生する。</p>

◇21世紀COEプログラム委員会における評価

<p>(総括評価) このままでは当初目的を達成することは難しいと思われるので、助言等に留意し、当初計画の適切な変更が必要と判断される。</p>
<p>(コメント) 本プログラムは、「日本文化型看護学の創出」を実践知に着目して実現しようという大きな目標を掲げている。看護学の理論的構築が欧米に主導されてきた状況を打破しようとするものとして期待されていた。しかしながら、主要な方法論として用いられている質的研究におけるメタ研究手法の開発に時間を費やしたことは理解できるにしても、研究活動の成果は、現時点では残念ながら十分とは言えない。 当初の目的達成のためには、日本文化型の看護を見出す視点もしくは切り口を明確にし、メタ研究を中心とする当初計画を見直し、現場での実践研究を中心とする計画に変更する必要があると考える。 現在進行中の一次研究についての説明がなされ、また、サブプロジェクトの再編、多様な背景を持つ研究者の採用、多面的な連携の強化等を含む創意工夫がなされたことは評価でき、今後の展開が期待される。 若手研究者の育成については、大学の支援等の努力が伺われ、人材育成の目標とその戦略が明確になり、能力開発への組織的取り組みの一端も示されたことは評価できる。 今後も強力な拠点形成に向けていっそうの努力が望まれる。</p>